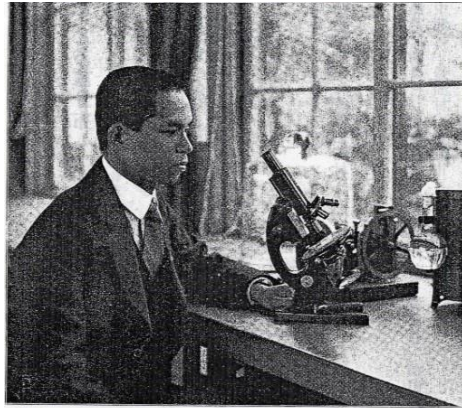


佐藤清明資料保存会会報

No. 6



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会
里庄町立図書館

2020.12.10.

会報第6号もくじ

1. 会長あいさつ	佐藤清明資料保存会会長・里庄町長 加藤 泰久	1
2. 巻頭論考：明治以降の岡山県における民間の植物研究の軌跡	—里庄町出身の研究者 佐藤清明、横溝熊市、安原清隆氏について— 顧問 土岐 隆信	2
3. アーカイブス		
⑥ 浅口郡植物研究家…佐藤晴明著「浅口郡植物誌」から		9
⑦ 石鎚山登山記…「まんさく」第9号掲載・横溝熊市氏執筆		10
⑧ 横溝熊市氏の標本蒐集熱…「まんさく」No.10から		14
⑨ 笠岡諸島とその周辺の植物…「吉備の植物」No.3から		15
⑩ フウトウカズラとナミキソウ…「吉備の植物」No.1から		16
4. 佐藤清明先生を師と仰いだ横溝熊市先生の回想		16
5. 第4回「里庄の清明さん展」の記録		17
6. 横溝熊市…人と業績…		18
7. 編集後記		21

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

あいさつ

今夏は梅雨明けと同時に例年以上の猛暑が続きましたが、歴史民俗資料館前の菊桜はおかげさまで順調に生育しています。

令和2年は新型コロナウイルス感染症で始まり、世界的に経済、文化、スポーツ、日常生活等全てにおいて変更、縮小、中止等を余儀なくされました。発生から約1年が経過しようとしており未だに収束の見通しは立っていませんが、少しずつ前に進み出しています。佐藤清明先生がご存命であれば、この状況をどうぞ覧になられたでしょうか。

資料保存会は感染予防について色々と工夫をしながら、活動や研究を進めています。その中で清明先生を取り巻く方との関係や、その方自身のフィールドワークが一つ一つ丁寧に洗い出されてきて、活動に一段と深みや重みが増してきたような感覚を覚えます。

以前より課題であった、池田邸の菊桜の確認については、資料の中から植樹当日の貴重な写真が発見されたことから、特別展「池田厚子様と佐藤清明ゆかりの菊桜展」を町役場と里庄町立図書館で開催することができたほか、池田家に樹木の現状と写真撮影をお願いしたところ、内諾を得ることができました。

また、東京在住の作家 荒俣 宏さんから、埼玉県所沢市にある角川武蔵野ミュージアムにおいて「荒俣宏の妖怪伏魔殿2020」において、清明先生の妖怪研究を広く紹介したいという申し出があり、清明先生が昭和10年に書かれた「現行全国妖怪辞典」が現在展示されているところです。

さらに、高梁川流域連盟機関誌「高梁川」に、生宗脩一副会長による「佐藤清明先生」について寄稿が掲載される予定です。長期間にわたる調査や資料整理、執筆活動に敬意を表するとともに、多くの会員、関係者のご協力を賜り素晴らしい内容となりましたことを心から感謝申し上げます。

このように、保存会の活動が着実に実を結んでいることは、大変うれしく、会員皆様の地道な取り組みのおかげであり、さらに大きく花開くことを願っております。

最後になりましたが、来る、令和3年が皆様方にとりまして、明るく健康で素晴らしい年になりますよう、心よりお祈りし挨拶いたします。

令和2年12月

佐藤清明資料保存会会長
里庄町長 加藤 泰久

明治以降の岡山県における民間の植物研究の軌跡

—里庄町出身の研究者 佐藤清明、横溝熊市、安原清隆氏について—

顧問 土岐 隆信

1. はじめに

明治時代から現在まで多くの植物研究者が県内を歩き、観察、採集などを行ない、多くの植物が新発見され、また新しい生育地が見いだされた。そして、その人達により、報告書、論文、目録、同好会誌などが作成されたが、謄写版印刷されたものが多く、印刷部数も少なく、配布先も同好者などに限られており、現在のように図書館などに保存されていないものが多い。

このような状況であるので、発行された報告書なども所在が不明なものも多く、論文名や書名だけが記録されているものも多い。また著者自身も、過去に植物の観察会などで指導を頂いた先輩諸氏の論文、報告書等も同様に保管できていないものも多い。そこで今後の植物研究の一助にしたいと考え、調査を開始し、論文や同好会誌などのリストの作成を始めた。そのため、明治時代から平成時代までに活躍された 35 名の民間の研究者を取り上げた。その 35 名は吉野善介を始めとして県内での新種の発見や多くの論文を書いた方や岡山県植物研究会などで活躍した民間人である。

この調査結果については、2020（令和 2）年 3 月発行の岡山県自然保護センター研究報告第 27 号に掲載した。今回はこの中の先駆者あるいは実績が大きいと思われる研究者 7 名と里庄町出身の研究者佐藤清明、横溝熊市、安原清隆の 3 氏について取り上げた。

2. 植物のとらえ方

植物研究ということで県内の多くの民間人が取り組んできたが、多くの人はどのような植物がどこに生育しているかという点に力点を置き、また県内において新発見かどうかということなどを調査している。しかしながら植物研究ということについては、形態、含有成分や利用法などいろいろな角度から研究されてきた。植物の名前は、生活の中に密着して使用されているものなどについては、昔から名前がつけられ、また地方での呼び方があり、それは日常に使われてきた。田の畦や山野に生育しているものなどで特に利用価値がないものや目につきにくいものは、身近に生育していても、ひとまとめにした呼び名や、ただ単に雑草と呼ばれてきた。そこで、植物についての名前、考え方など古代から明治時代までの流れを見てみる。例として、次に掲げるものについては、古来より名前が付けられ、また海外から輸入されたりして、一般によく使われたり、呼ばれているものである。

- (1) 食料、飼料として利用されているもの。
- (2) 薬草・毒草（新薬、民間薬、漢方薬の原材料として利用されているもの。）薬用植物学、本草学として研究されているもの。
- (3) 衣類や住居の原材料、工芸用として利用されているもの。
- (4) 園芸、鑑賞用として庭木、盆栽、花卉などで利用。
- (5) その他、宗教用など（榊、シキミ、大麻など）として利用。

3. 歴史的にはどうか。

古事記には約 80 種、日本書紀には約 110 種の稲、麦、粟などの五穀を初めとし家や屋根の材料となった竹や葦など当時利用されていた植物が記載されており、これを見ることにより古代からの利用状況や呼び名を知ることができる。この中で知られている植物を 3 種取り上げて

みたい。

(1) ガマ (蒲)

古事記に書かれている因幡の白ウサギの話に出てくる植物であり、身近なにある湿地や休耕田などで見ることができる。大国主命が通りかかると皮を剥かれた赤裸のウサギが泣いていた。そこで大黒様はウサギに真水で洗い、ガマの穂綿にくるまれば治ると教えた。これは、ガマの黄色の花粉(穂黄)に止血作用があるので効果があり、このことを古代の人達が知っていたことである。これは我国の薬の歴史の始まりとされる。

(2) ヒカゲノカズラ

天照大神が天の岩屋戸に入られてしまった時、世の中は暗闇になった。このとき、天鈿女命(アメノウズメノミコト)が着衣を取り去り日影を襷にして舞うと、戸の前で神々はやんやとはやし立てたので天照大神は何事かと戸を少し開け外の騒ぎを見た。そこで手力男神(タジカラオノ神)が岩屋戸を一気に開けたので、また世の中に光がさしだしたという話が載っている。日影はシダ植物のヒカゲノカズラといわれる。これは日当たりの良い山裾などに生育しており、これの胞子は石松子(セキショウシ)といい、皮膚のただれの治療、丸薬の製造、菓子の衣、人工授粉時の花粉の増量剤などに使用された、

(3) タチバナ (橘)

右近の橘、左近の桜として、御所の紫宸殿や平安神宮の本殿の前に植栽されている植物がタチバナである。垂仁天皇の勅命を受けた田道間守(たじまもり)を常世の国に遣わして、非時香果(ときじくのかぐのこのみ)と呼ばれる不老不死の力を持った霊薬を持ち帰らせたという。これは橘の実といわれ、これを持ち帰ったが帝は崩御されていた。この橘は菓子の祖といわれる。タチバナは日本固有のカンキツであり、高知、三重、静岡などに自生する。文化勲章は橘の花がデザインされている。

(4) 風土記、正倉院の植物

風土記は713(和銅6)年に元明天皇の詔勅によって、諸国の草木・鳥獣・虫魚・鉱物などを集めて報告させたもので、たとえば出雲風土記には多数の薬草が収載されている。また、1200年以上前の時代から、正倉院で保存収蔵されている薬物に人参、甘草、胡椒、大黄、香木などが保存されている。当時このようなものが貴族などの疾病の治療に使われていた。香木など南方からも輸入されていたものも現存している。

(5) その後の植物についての歴史等

(ア) 江戸時代

漢方薬、民間薬として使用された植物は本草学として研究され発達した。

徳川吉宗は海外からの生薬の輸入が多いので、薬草の国産化推進策をすすめ、これに基づき丹羽正伯に薬草栽培の国産化を命じ、特に人参(朝鮮人参、幕府から種子が下賜されたので御種人参ともいう)の栽培を推進した。人参の栽培は会津、日光、出雲などで行なわれ、また、甘草の栽培が甲州で行なわれた。全国各地に薬草園が設けられ、小石川植物園(東京)、森野薬草園(奈良)が現存している。

(イ) 江戸時代末期から明治時代

オランダ船により多くの海外の知識が入り、蘭学が発展した。

ケンペル、ツェンベリー、シーボルトなどから植物を初めとして多くの学問の導入があった。

津山藩藩医の宇田川榕庵は植物学を日本へ紹介した人で、著書に菩多尼訶経 1822（文政5）年、植学啓原 1834（天保5）年がある。これらは津山市にある津山洋学資料館に展示してある。

(ウ) 明治時代から大正時代

新しい教育制度が始まり、お雇い外国人などにより、西洋からの学問が入ってきた。また、これらの外国人により植物の調査が行なわれ、多くの新発見や命名がなされ海外に紹介された。

(エ) 岡山県における植物研究

岡山県で最も古いとされている報告は次の2報とされる。

安井伴一 美作植物1班：植物学雑誌、7巻76号1893（明治26年）

山本頼輔（沼田頼輔）岡山県北部地方植物採集記：植物学雑誌9巻98号、1895（明治28年）

上記の2報について再調査をした結果は以下の通りです。

- ・安井伴一は東京帝国大学理科大学に在籍していた。
- ・山本（沼田）頼輔は、1867（慶応3）年生－1934（昭和9）年歿。神奈川県出身で神奈川師範学校高等師範科卒業。西大寺町立高等女学校の初代校長となり、明治39年度から44年度10月30日まで就任した。紋章学、銅鐸の研究をおこなっている。

東京や京都から多くの大学関係者がたびたび来県し植物採集を行ない、また植物に興味を持ち研究している者たちに対して県内各地で、採集会や講習会を行なった。

牧野富太郎を例にあげると岡山には5回来県しており、新種の発見もあった。

1回目 1906（明治39）年津山、備前、真庭方面の調査を行っており、ヤマヒョウタンボクの発見。

2回目 1908（明治41）年津山方面の調査。

3回目 1913（大正2）年高梁方面の調査を行い、ジョウボウザサの発見。

4回目 1914（大正3）年高梁・新見方面の調査を行い、アテツマンサク、シラガブドウの発見。

5回目 1935（昭和10）年新見方面の調査。

(オ) 岡山の植物に関係した大学関係者等

牧野富太郎、小泉源一、田代善太郎、中井猛之進、本田正次、大井次三郎、原寛、前川文夫、津山尚、村田源らの東大・京大の関係者が多い。

これらの先生方は、岡山へ採集、調査に来た外、県内の研究者が採集した標本を送り同定などしてもらっている。

(カ) 昭和初期から戦前まで

ここで特記するものは「生物採集総動員」である。

1930（昭和5）年1月13日から20日にかけて陸軍特別大演習が県南部一帯で行なわれた。来県される昭和天皇に県内の生物を採集してご覧に入れようと、香坂岡山県知事の発案で県下の児童生徒により植物と昆虫の採集が行なわれた。これは生物採集総動員といわれ、6月1、2日に県下一斉に植物採集が行なわれ、標本は68万点、7月1日に昆虫採集が行なわれ標本は18万点を数えた。植物の顧問は京都大学の田代善太郎と吉野善介（上房郡高梁町）であり、155科1763種に整理して、昆虫の標本とともに「岡山県内生物目録」にまとめご覧に入れた。この採集事業に佐藤清明、山口國太郎、小坂弘、赤木敏太郎などが加わっており、研究者間の交流が深まり、そして県内各地の目録作成などが行なわれた。採集された標本は精選され献上されたが、その他の作成された標本は岡山県郷土館に収蔵されたが岡山空襲により灰燼

となった。

(キ) 戦後から平成まで

多くの研究者、特に教育関係者が県内各地で調査を行ない、同好会の結成や会誌、目録などが多く発表された。ここで特記するものは「岡山県植物研究会の発足」である。佐藤清明が1980（昭和55）年に勲5等双光旭日章を受賞したので、植物仲間で叙勲祝賀会を計画し、1981（昭和56）年5月31日にホテルニュー岡山で開催された。出席者は岡山県天然記念物緊急調査員やその当時植物研究に携わっている者など22名であった。その席で佐藤清明が「植物研究者が一同に会ったのだから、皆でまとまって「岡山県植物誌」を作ってはどうか」との話があった。そこで、西原禮之助を中心に加藤豊や花田親兵衛ら出席者の協力により、岡山県植物研究会の設立総会が、1981年9月15日岡山市立オリエンタ美術館講堂において開催された。出席者全員の推挙により佐藤清明が初代会長に就任し、役員も決定した。2代目会長は西原禮之助が1982年から就任したが、1994（平成6）年会長の西原の死去により自然解散となり、「岡山県植物誌」は未完となった。岡山県植物研究会誌は第1号（1982年）から13号（1994年）まで、岡山県植物研究会報は第1号（1982年）から第29号（1992年）まで発刊された。その当時県内には民間の者が発表できる雑誌等がなかったので県下各地の多くの研究者が会誌に投稿し、会報には会の報告事項、植物関係のニュースや採集会の報告などが掲載された。この植物研究会の総会、採集会などにより、県下各地の研究者の繋がりが深まった。

4. 明治以降に活躍した主な植物研究者、特に佐藤清明、横溝熊市が活躍する以前の人達を取り上げる。

(1) 吉野善介

1877（明治10）年上房郡高梁町の薬店に生まれる。高梁高等小学校を卒業すると家業の手伝いをしながら、薬の注文取りや配達に歩いている途中の路傍の草花に関心を持ち、植物に興味を持った。植物を採集し、不明なものについては牧野富太郎に手紙で質問を始め、教えを受けた。また、1900（明治33）年高梁中学校に西原一之助（さいはらいちのすけ）が博物の教師として着任したので指導を受けた。1929（昭和4）年に「備中植物誌」を刊行した。1930（昭和5）年の生物採集総動員に田代善太郎（京都大学）とともに植物採集指導者となり5月10日から19日の間、県下各地を巡回して指導した。1932（昭和7）年に大阪の株式会社武田長兵衛商店研究部に入社し、植物の採集と標本の整理を行ない、また近畿地方の植物採集を行なった。1945（昭和20）年戦火を避けて高梁に帰郷し、武田を退社した。1948（昭和23）年第1回岡山県文化賞を受賞した。これは吉野の他に本田彗星で有名な本田實と詩人の永瀬清子が受賞している。1953（昭和28）年吉野植物研究所を創設し、「備中の植物」第1号を発刊した。吉野の発見した植物はチトセカズラ、ナツアサドリ、チョウジガマズミ、キビノクロウメモドキ、フキヤミツバ、ナガバヤクシソウ、ビッチュウアザミ、ミコシギクなど約30種であり、論文も多い。1964（昭和39）年に逝去した。論文は『備中植物誌』を初めとして多数あり、佐藤清明資料保存会会報 No.3 を参照されたい。

(2) 小坂弘

1904（明治37）年に阿哲郡野馳村大野部で出生。岡山師範学校を卒業し同年唐松小学校訓導として勤務、その後阿哲郡内、新見市の小学校に勤務、1936（昭和36）年に哲西町立野馳小学校長で退職した。1929（昭和4）年文部省植物検定に、また1940（昭和15）年の文部省動物検定に合格した。

哲西町文化財保護委員会委員長を務め、1977（昭和52）年に勲五等瑞宝章を受章した。そして新見市名誉市民に推挙された。鯉が窪の湿性植物群落の動植物、特にオグラセンノウ、ビ

ツチュウフウロ、ミコシギク、シラヒゲソウ等鯉が窪湿原の代表的な植物の調査を行なった。吉備博物同好会、岡山植物同好会、吉備の植物同好会を主宰し、それぞれ「まんさく」「岡山の植物」「吉備の植物」の同好会誌を発行した。佐藤清明も「まんさく」「吉備の植物」に多数投稿している。1999（平成 11）年に逝去した。論文は多数あるが割愛する。

（3）赤木敏太郎

1879（明治 12）年に阿哲郡草間村姫原で出生、高粱中学校、岡山師範学校二部を卒業後阿哲郡草間尋常小学校などの訓導となり豊永小学校長を勤めた。

1941（昭和 16）年に草間村長に就任した。チョウジガマズミ、ホソバナコバイモを 1904（明治 37）年新見で発見した。1941（昭和 19）年に逝去した。

（4）山口國太郎

1879（明治 12）年に阿哲郡新砥村田淵に出生、岡山師範学校を卒業後阿哲郡内の各小学校教諭を務め、1931（昭和 6）年矢神小学校長を最期に退職した。

1914（大正 3）年新見町黒髪山で牧野富太郎とマンサク類を見たときに、牧野博士は、新種だからクロカミマンサクと名付けようとした。このときに山口は、これは阿哲郡一帯に生育していると話したところ、牧野博士はそれではとアテツマンサクと名付けたとの話が残っている。

1931（昭和 6）年広島県比婆郡の猫山でネコヤマヒゴタイを発見した。また、1930（昭和 5）年の陸軍特別大演習の時、オグラセンノウ（仮の名をサワナデシこととして）を鉢植えにして、天覧に供した。1936（昭和 11）年に逝去した。岡山で植物研究を行なった加藤豊は子息である。

6. 里庄町出身の研究者（3名）

（1）佐藤清明

1905（明治 38）年 5 月 9 日に里庄村で出生、1998（平成 10）年 9 月 17 日に逝去した。金光中学を 1923（大正 12）年に卒業し第六高等学校（六高）生物学教室に就職し、その後福岡県立小倉中学校理科教師となった。帰郷後、1931（昭和 6）年から 1987（昭和 62）年まで生物教師として清心高等女学校に奉職した。その後、清心女子大学講師、岡山女子短期大学、岡山大学薬学部、農学部、医学部などで講師を勤めた。植物学、動物学、民俗学や妖怪や方言などの多彩な分野で活躍し天然記念物の調査に力を尽くした。佐藤の植物関係における功績の一つにキクザクラの増殖がある。キクザクラは宮中において育成された御所桜の一種とされるヤエザクラで、多くの特徴があり 100 枚から 300 枚の花弁があり、花形は球状である。六高の大渡忠太郎教授（医事評論家大渡順二の父）が校庭に植えていたキクザクラを六高で助手をしていた佐藤が里庄村の自宅のサクラに接木をしていた。1945（昭和 20）年 6 月 29 日の岡山空襲で六高のキクザクラは灰燼に帰したが、佐藤が接木していた自宅のキクザクラは命脈を保った。昭和天皇の第四皇女順宮厚子内親王（岡山池田家に降嫁）の御紋章に選ばれており、1952（昭和 27）年佐藤はご来岡の昭和天皇に自ら増殖し保存していたキクザクラを献上した。また 1953（昭和 28）年には、両陛下は佐藤が育成したキクザクラを後樂園の延養亭の前庭にお手植えされた。その他佐藤の育成したキクザクラは岡山大学や六高記念館にも植えられ、毎年花を咲かせている。佐藤の人柄や考えを偲ばせることができるものに、20 ページの小冊子「よき母」1933（昭和 8）年 10 月がある。これには内外の著名な人の母 53 人のエピソードが書かれている。これについて小坂弘は「まんさく No.9,p36~37.1934(昭和 9)年 吉備博物同好会」の紹介コーナーで、「よき母」(佐藤清明氏)として、以下のように紹介しているので引用する。

「今回島田ミヤコと結婚仕り左記に移転致候此段御通知申上候岡山市内山下石山一〇 佐

藤清明」と記されたカブトガニ雌雄を寫した美しい繪葉書とともにとどけられたのがこの書で更に緑色の紙片に次の様に書かれてあった。『幼くして父に別れ、母の手のみに依って、育った一人子の私も茲に二十九の秋を迎えて、とうとう結婚する事になった。然し、非常時の現下、殊に薄給の貧書生にはこれといふ、御披露の途も無い。そこで所謂冗費を節して、この貧弱なるパンフレットを作り、親しき方々へ記念の為に贈り、一つにはご披露に代え、二には私のみならず廣く世の母親に向って感謝の意を表する事にした。御利用を乞へば幸甚である。』と・・・藤井大将の母を初め東西古今の母の愛をたたえ、最期に『あゝ人間此の世に出現して以来幾千年。そして且つ母たりし女性果して幾百億。それ等の力こそ誠に生命の根源であった。文字通り全人類の慈母であった。』と叫んで筆をおいてある』と紹介している。このように佐藤は母親に育てられた事に感謝の念を持ち、歴史に出てくる母親についてのエピソードを書いて、母たる女性への感謝を述べており、佐藤の人柄が偲ばれる。佐藤は植物関係だけでなく文化、教育など多彩な活動を行なったので、1980(昭和55)年に勲五等双光旭日章を受賞する。受賞の功績調書には『第六高等学校に勤務したことが植物学研究的契機となり、吉野善介、二階重樓(にかいしげたか)及び赤木敏太郎等の指導を受けたことで植物学の基礎作りが確立した』と記載されている。佐藤は、植物関係のみならず、妖怪、動物学、民俗学方言など多方面にわたり非常に多くの論文を書き、「リムルス」を発刊、雑誌等へ発表している。植物関係の論文等については、佐藤清明資料保存会会報 No.3 佐藤清明と岡山の植物研究者を参照されたい。佐藤の植物標本は倉敷市立自然史博物館に保存され、蔵書等は佐藤清明資料保存会が管理している。

(注) 二階重樓 山口県出身。1902(明治35)年岡山縣高松農学校教諭として着任。1903(明治37)年徳島農学校に転任した。この間、マツムライヌノヒゲ、キビノミノボスゲロ、ビッチュウヤマナシ、キビノダケ、ミコシギクなど採集している。

(2) 横溝熊市

1897(明治30)年5月31日里庄村で出生、1977(昭和52)年10月27日に逝去。里庄町里見で薬種商を営む傍ら植物の研究を行っていた。1954(昭和29)年4月鴨方町の北方の山地でエヒメアヤメ(タレユエソウ)を発見し、吉野善介、佐藤清明に連絡した。岡山県の初発見であった。(備中の植物 第4号 p8-9 1955(昭和30)年)3月。

小坂弘が「まんさく No.8, p31 1993(昭和8)年10月1日、吉備博物同好会」の紹介コーナーで「横溝熊市氏の標本蒐集熱」として『氏の植物標本蒐集熱は非常なもので本業の薬種商は殆どなげうってでも後半生を採集のために費やして学会に貢献されようとの真剣な努力は涙ぐましいものがある』と賞賛した。また、『備中南部、北部、伯耆大山、備後北部など採集され、多数の標本を蔵されている。』、『横溝氏は国内の植物壺万数千種の中、先ず第一期は6,000種を目標に集めたいと言っている』と書いている。横溝は薬種商であったので、薬草に興味があったのであろう。薬草についての「薬用植物漢名辞典」「岡山縣の薬用植物」を出している。また目録として以下のものがある。

「植物腊葉標本所持品目録」1932(昭和7)年

「植物腊葉標本所持品目録 補遺其一」1933(昭和8)年

この他の論文については、佐藤清明資料保存会会報 No.3 「佐藤清明と岡山の植物研究者」を参照されたい。横溝が収集、採集した植物、岩石などの標本は里庄町歴史民俗資料館に保存されている。

(3) 安原清隆

1945(昭和20)年4月12日出生。現在もスゲ属を専門分野として研究に励んでいる。工業高校を卒業後岡山大学工学部に勤務しながら、国家公務員初級、また上級職試験に合格

した。佐藤清明と共同で研究した、現在も研究している唯一の人である。佐藤清明との共著論文に「県南里庄町の湿原フロラ」岡山県植物研究会誌第1号、p16～21、1982（昭和57）年があり、その他スゲ属関係についての論文を多数発表している。

6. 佐藤清明以降の主な研究者で特記する人

(1) 大久保一治

1907（明治40）年3月5日瀬戸町山の池（旧可真村）で出生、没年は不詳である。

1931（昭和6）年東京高等師範学校卒業後、高知、札幌で教職に就く。1945（昭和20）年5月帰郷し教職に就き、県立瀬戸高等学校に1966（昭和41）年まで勤務した。1968（昭和43）年岡山花の会を結成主催し、機関誌『モモ・モミジ』を毎月発行し、会員対象の観察会を県内外で度々行なった。また、県内をくまなく歩き調査を行なっている。

著作の「私の採集した岡山県自然植物目録 付帰化植物・栽培植物 増補改訂版 平成11年（1999年）」は県下を実地に歩いた結果であり、貴重な目録である。1926（大正15）年に真庭（旧上房郡上水田村）でビッチュウヒカゲワラビを発見した。

また、1927（昭和2）年には岡山市東区瀬戸町でビゼンナリヒラを発見した。これは牧野富太郎によって命名された。

(2) 難波早苗

1913（大正2）年吉備中央町（旧上房郡豊野村）で出生、1998（平成10）年に逝去。

1932（昭和7）年新見農林学校卒業後、岡山県職員となり、農事試験場、県下の農業改良普及所に勤務し、1969（昭和44）年に県を退職した。

植物について吉野善介の指導を受けており、1952（昭和27）年高梁市においてタカハシテンナンショウを発見した。臥牛山（高梁市）の植物について詳しく調査しており、佐藤清明との共著もある。

現在は採集や観察に自動車で行くことが多いが、昔の人は汽車やバスで目的地近くに行き、そこからは徒歩で道沿いの植物を観察や採集しながら、目的地に行っていたので非常に丁寧に観察されているので発見なども多い。

ここに記載した難波早苗と大久保一治そして古屋野寛（重井病院薬用植物園名誉園長）の3人が県下をくまなく歩いて調査した人だと思われる。難波の標本11,000点は岡山県自然保護センターに、学会誌など1,260冊の蔵書は岡山県立図書館に難波文庫として収蔵された。

(3) 西原禮之助

1915（大正4）年11月27日岡山市南方において出生、1994（平成6）年4月4日逝去。1939

（昭和14）年早稲田大学商学部卒業後入隊し、1941（昭和16）年陸軍経理学校丙種学生を卒業、戦地に赴きフィリピンのレイテ島より帰還している。お多美鶴酒造株式会社の社長であり、岡山市文化財保護審議会会長など公職を多数勤めた。このことにより岡山市有功表彰、藍綬褒章、また1993（平成5）年には勲五等双光旭日章を受賞した。

植物に関する造詣が深く、1967（昭和42）年10月には湯原ダム湖畔で昭和天皇皇后両陛下に現地の植物についてご進講した。牧野富太郎をはじめとする東京や京都の植物研究者または大学関係者との太い繋がりを持っていた。酒造会社の経営や多くの公職をこなしながら岡山県植物研究会の立ち上げから第2代の会長として、会を統括し、観察会を行なうなど植物研究者の集まりの世話を非常に良くした。西原の多くの蔵書は牧野富太郎との縁戚関係により高知県立牧野植物園に収蔵された。

7. まとめ

明治以降の民間の研究者として10名取り上げた。これら10名の人達については佐藤清明資料保存会会報 No.3 に掲載しており、重複するところが多い。また佐藤清明についてはたびたび植物以外の内容についても清明研究会等で報告されている。横溝熊市についても令和2年7月18日佐藤忠士氏により「佐藤清明先生を師と仰いだ横溝熊市先生の回想」として詳しく報告されたところである。里庄町出身の3名の植物研究の業績は多大なものがあり、今後まだまだ業績が発掘されるものと思料される、

なお、今回35名中、今回取り上げてない25名について、名前だけ記載する。

二階重樓、西原一之助、坪井近三、加藤豊、井木長治、花田親兵衛、杉原操、徳山鋏也、押柄慎吾、本位田隣太、岳山利夫、中村順平、三宅一喜、堀口正志、宗田克巳、高田真一、花田靖之助、難波英生、富山俊夫、赤沢郁満、古屋野寛、高山敬三、渡邊義行、小島裕子、光畑之彦の方々であり、これらの方々は県内各地で調査され、論文も多数発表されている。

この文は令和2年9月19日に開催された第2回清明を読む会で発表を行なった内容をもとに加筆訂正等したものである。

アーカイブス ⑥ 「浅口郡植物研究家名簿」・・・浅口郡植物誌 p.77 (昭和7年刊)

浅口郡植物研究家名簿

浅口郡ノ内デ植物ヲ現ニ採集サレツヽアル人々ニシテ私ノ知ル範囲内ノ人ヲ五十順ニ掲ゲテ参考ニスル。

浅野卯一郎氏 (大島村正頭)	二階堂幹次氏 (金光町占見新田)
石田 泰氏 (大島村石砂)	友田秀一氏 (金光町佐方)
宇野確雄氏 (神戸市親和高女)	出宮虎夫氏 (玉島町雲明)
岡 清次氏 (都窪郡早島町)	平野治太氏 (金光町占見)
小野隆一氏 (玉島町玉島高女)	藤井隆夫氏 (笠岡町男子校)
岡野義雄氏 (金光小学校)	別府利八氏 (玉島併置校)
岡本志一氏 (大島村石砂)	三門白士氏 (船穂村柳井原校)
兼信 清氏 (船穂町船穂)	宮地勝二氏 (玉島町)
小澄 清氏 (金光町金光中学)	森川秀四氏 (都窪郡)
金光義忠氏 (金光町大谷)	森原官一氏 (寄島併置校)
佐良木秀四氏 (都窪郡)	守屋護伊知氏 (小田郡大井村)
世良高雄氏 (金光町金光小学校)	山下 尚氏 (六条院村真止戸山)
田辺市治氏 (玉島商業学校)	横溝熊市氏 (里庄村殿迫)
谷田万亀雄氏 (鴨方町小坂)	吉野善介氏 (上房郡高梁町)
坪井近三氏 (高松農学校)	小坂 宏氏 (阿哲郡野馳村)
間田早苗氏 (玉島併置校)	渡辺豊治氏 (金光町津)
仁科 博氏 (里庄町岩村)	渡辺熙海氏 (大島村中大島)

佐藤清明著「浅口郡植物誌」の記事。原本はガリ版刷り。スペースの関係で活字に致しました。
併置校は、尋常科と高等科を同一敷地内に併設した小学校。

石 鎚 山 登 山 記

横 溝 熊 市

先づ登山記を綴る前に石鎚神社の祭神並に沿革の大要を誌して見やう。石鎚神社は伊豫の高峰海拔千九百八十余米の頂上に鎮座し奉り新居郡大保木村西之川山に位す。

祭神は天照大御神を産み給ひし伊邪那岐命の第二の御子であり一神三体の像を現じ給ふ即ち和魂、奇魂、荒魂にぎみたま くしむたま ありみたまと別ち和氣、正道、武勇を守護し給ふ往古よりの鎮座なりしが深險の山なる故參詣の道すらなかりしが、役の小角大神の崇敬厚く後石仙道人石土藏王大権現いわづちと稱へ信仰し山路を開き登山者を導き常住舎じうぜんこうじやう(今の成就社)創立し。後上仙光正じうせんこうじやうなごの高僧が横峯寺。前神寺を開き當社の別當とされ後数々の寺院も成れり。

桓武天皇、文徳天皇の御尊敬により國主に命し諸種の經營ありしと傳ふ源頼朝及び河野家、豊臣家の信仰厚く其臣下加藤、福島を始め四國、中國、九州の諸大名の信仰ありし爲め今に崇敬者十六ヶ國以上にて二萬三千有余人の先達信者を率ひ登山參詣す。

偕元の成就社殿は應長年間豊臣秀頼公の御造營なりしが明治二十二年災火に遇ひて現今の社殿は其後の再建に由るものなり。

中古佛教の盛なる頃には佛教の所有となり神明を権現と號し神社に別當寺院を設け石土大神いしづちを石土藏王大権現いしづちと稱へ横峯寺前神寺の別當並に附屬寺院ありしが明治初年長き大命により神佛混合を禁ぜられ石鎚神社と改められ同時に別當寺院を廢せらる。

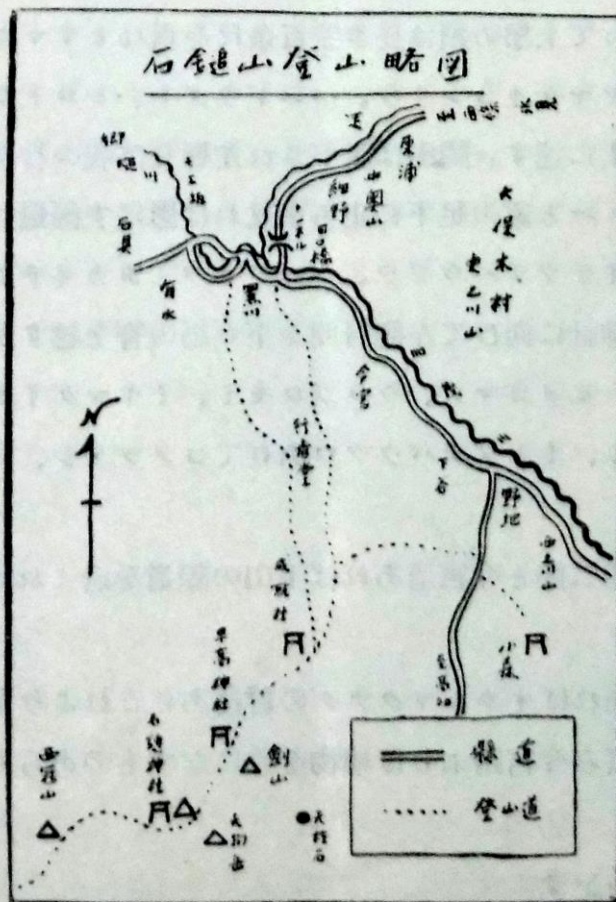
祭日は毎年七月一日より十日までにて一般信者參詣にて雜踏甚だし。

春祭は四月十四、五日新居郡橘村の石鎚神社にて執行す。

自分は當地の稻の挿秧を濟ませ講社の參詣團と共に石鎚神社に參詣なすを例とす本年も七月五日夜寄島港出發發動機船にて翌朝伊豫國周桑郡水見川口に着上陸し四國靈場第六拾參番の札所吉祥寺に詣て長谷の坂道を一の鳥居まで辿る石鎚神社祭典中は小田郡笠岡港よりは乗合船の便あれども常は尾道より伊豫今治に聯絡船にて渡りこれより小松驛迄汽車の便により長谷に出するを最も便ならんとす。

一の鳥居を鳥渡下れば程なく高知縣に通ずる縣道に出づ。(尤も近道に依らざれば小松驛より縣道傳ひにて自轉車自動車にても行くを得) 白衣の行者は絶間なくチリン〜鈴の音と共に行き交ふ人とお上りさんお下りさんの挨拶忙しく身仕度輕々しく石鎚山を源となす加茂川添にて進み行く極樂寺に詣で一里余を過ぐれば河内八幡神社頭昔役の行者の垢離取行場と聞く我等も河水に飛び入り身の穢を流し心を淨めて登り行く。程遠からず川口橋數年前迄は丸太材をワイヤーにて山より山に釣り歩めば右往左往に揺れ我等も恐れげに四這にて渡りし事ありしが今は鐵筋コンクリートの豪大さ。此處迄は自動車、自轉車も通すれき之れよりは愈々登山路黒川上り今宮上り西之川上りの分岐点にして吾等は定宿の今宮(距十八丁)指して登り行く。

常宿にて晝食を濟ませ携帯品の不用物は預け置き一憩の後直ちに登山なす事となせしが時間の都合にては宿泊し翌朝早く登山參詣し歸途晝食し氷見川口迄歸る事あれき本年は登山參詣後夕刻下山し宿泊なす事とせり。氷見川口より七里弱石鎚山頂上迄三里余中腹成就社へ大略二里を距る。



成就社は標高千二百米實にして天候の都合或は身体虛弱の者は一切成就の社なりとして下山するあれき植物採集としては之より上部肝腎なり。これ迄は杖

を便りにナーマイダブで上り来りしが、もう杖も笠も携帯品全部預け置き風雨も厭はず白衣の儘よち登るものなりしが植物採集旅行には防水衣と胴亂とは命ある限り手離すべからざるなり。

この邊りにイハセンタウサウ、クロソヨゴ、ヤマブドウ、シロモジ、エンクワウカヘデ等を採集しつ、禪師ヶ森に至れば一面のイシヅチザサの群落にしてシコクシラベ、モミ、ツガ、ヒメシヤラ等單立す。

早高神社の鎖は急峻なる巖壁に懸下され就中下りの鎖は殆ど垂直と言つて過言ならず此處は是非登らじとも麓を左廻せばブナ帯にして種々目新しき物雜生す程遠からずして劍山(標高一五〇〇以上)に辿り着く大剣、小剣大権現鎮座され峻険なる行場、自分は中途にて後戻りした邊りはサイコクニシキウツギ、イハカバミ、ヒメコマツ、ツマトリサウを見る。イシヅチザサに包まれたる細道を峯風を浴びつゝ進み行く、もし折悪しくして霧に捲かるゝ時は四海の中の孤島に佇む感ありて同伴者も聲を便りに近寄るあり、風聲はヒュー〜と物凄く唸る呼んで天狗風(狗賓風)と稱す邊りの植物に目もくれずよち登れば一の鎖二の鎖、三の鎖ありて上部の鎖は長さ三百余尺を垂れミヤマカラマツ、ミヤマモミヂイチゴ、ミヤマダイコンサウ、ベニドウダン、シロドウダン、ミネカヘデ等を採りつゝ頂上に達す。隣山は眼下され左廻せば覗の行場千仞の谷間、杉の並木上をシュー〜と霧の足下に走るを見れば思はず後退りなすを覺ゆ、岩間にコメツツジ、イチヅチバウフウ、シュロサウ、タカネザクラ、ダケカンバミネカヘデ等あり神社に向ひて左側岩間を下り馬の脊を越すが如き絶壁上を斜せば天狗岳に至る。ヒメコマツ、ウラジロモミ、ミヤマダイコンサウ、ツマトリサウ、イハカバミ、イシヅチバウフウありてコメツツジ、ベニドウダンは花盛りなりき。

頂上よりは土佐道二條と今宮道あれば下山の際道を過まれば大過あるべし注意肝要なり。

歸途は天柱石に廻ればオホシヤクナゲの群落ありこれより常住に出で黒川に下れば深山植物に富み今宮路よりは植物を殊になすものあらん又雨之川下りも面白かるべし。

左に植物の概要を記す

今宮より常住社以下又は以上にもあるもの

モミヂカウモリ、ゴマギ、ガマズミ、ミヤマガマズミ、イハタバコ、コモチ

シダ、リヤウブ、トチバニンジン、ハリギリ、ミヅキ、アヲハダ、ヤマモミヂ
コミネカヘデ、カクレミノ、イハガラミ、ゴトウヅル、ヤマバウシ、ジンジサ
ウ、ユキノシタ、ノリウツギ、サハアヂサイ、ギンバイサウ、ツタウルシ、タ
ンナサハフタギ、サハフタギ、マメヅタ、カモアフヒ、ヒメヂシバリ、ハンシ
ヤウヅル、エンレイサウ、ウリハダカヘデ、ヒトリシヅカ、フタリシヅカ、ヤマ
アザミ、マンネンスギ、メギ、ミヅナラ、ダイセンヤナギ、ヤマソテツ、ネムノ
キ、ホタルブクロ、ムラサキホタルブクロ、ミツマタ、シロモジ、ダンクワウ
バイ、オホバケクロモジ、クロモジ、イタヤカヘデ、エンクワウカヘデ、イロ
ハカヘデ、オホイタヤメイゲツ、イハツクバネウツギ、ヤマハンノキ、ヤマヂ
ノホトトギス、タマガハホトトギス、ミヤマシキミ、ナルコユリ、チゴユリ、
ヒメシヤラ、タニウツギ、オホバシヤウマ、カシハバハグマ、ビヨウヤナギ、
ヤブレガサ、トサノモミヂガサ、アヲバスノキ、クマイチゴ、ケクマイチゴ、エ
ビガライチゴ、マルバマンネングサ、マツブサ、チヤセンシダ、ヤマイヌワラ
ビ、オホヒメワラビ、オホヒメワラビモドキ、オホバハチジヤウシダ、ミヤマ
クマワラビ、フモトシダ、ヒロハイヌワラビ、クマワラビ、イハガネサウ、イ
ハガネゼンマイ、イブキシダ、シノブ、ハカタシダ、ツヤナシキノデ、キノデ
ミヅシダ、イヌシダ、オニドコロ、キクバドコロ、ヒメドコロ、ヤマヨモギ、
コシアブラ、ヤマブキ、カヤ、イヌガヤ、シロカシ、クヌギ、ツブラジヒ、ハ
ナヤクシサウ、サハギク、ケアクシバ、オンツツジ、ナナカマド、ツシマナナ
カマド、ヒメウツギ、アラゲガマズミ、トサノミツバツツジ、ダイセンミツバ
ツツジ、ミツバツツジ、アケボノツツジ、ベニドウドン、シロドウドン、マタ
タビ、コバノクロウメモドキ、ナツツバキ、テキリスゲ、ヒヒラギ、ナンバン
ギセル、オクヤマヤナギ、モミヂバカラスウリ、ヤマシヤクヤク、クマシデ、
フジマス（栽植？）

常住社以上及附近

イハセントウサウ、クマノミヅキ、ムシカリ、ミヤマシグレ、クロソヨゴ、
ヤマブトウ、

劍山、早高山附近

ヒメコマツ、ツマトリサウ、サイコクニシキウツギ、フウリンウメモドキ、
ウラジロウツギ、オホシヤクナゲ、ブナ、ヤマハハコ、ホソバヤマハハコ、イ
ハカガミ、コイハカバミ？、タチイハノガリヤス、トグアザミ？イシヅチザサ

キヌタサウ、ヤマトリカブト、マヒヅルサウ、ツクバネサウ、オホケスグリ、
テバコモミチガサ、ヒゴクサ、ミヤマヒキヲコシ、オホバメギ、ケサンカクヅル
？、ヲタカラカウ、メタカラカウ、フクワウサウ、ヒメミヤマスマシレ、ヒメタチ
ツボスマシレ、ツガ、コメツガ、シユロサウ、ツルニンジン、ミヤマタニタデ、
タニタデ、アサノハカヘデ。

鎖附近及頂上並に天狗岳附近

ダケカンバ、タカネザクラ、シコクシラベ、ウラジロモミ、ミネカヘデ、タ
カネニガナ、シロドウダン、コバノエイランタイ、ミヤマダイコンサウ、ヒゲ
ノカリヤス、タウヒレン、オウタウヒレン、ミヤマカラマツ、ミヤマモミヂイ
チゴ、ヒメコマツ、ウスノキ、コメツツジ、シコクフウロ、イシヅチバウフウ
ヒメシラスゲ、ヒメスゲ、シヤウジヤウスゲ其他未詳の物各種ありき。

他の人より惠與されたる石鎚山産

オホバヨメナ、ミソガハサウ、ヒロハテンニンサウ、ヒメキリンサウ、サバ
ノヲ、ツクシトリカブト、シコクコバメグサ、サハダツ、ミツバテンナンシヤ
ウ、テバコワラビ、ヤマトチヤセンシダ。

尙此の外余吾氏著周桑郡植物誌に據れば多数の珍植物ある由なれ共參拜者同
伴の急行登山なれば未だ目にせざるもの多し何れ他日採集家の研究旅行にお伴
致したく希望す。

アーカイブス ⑧ 「まんさく No.8.」 p31 1993 (昭和8年)

△横溝熊市氏の標本蒐集熱

横溝氏については本誌 No.6 の紹介欄に一寸記したことであるが氏の植物標
本蒐集熱は非常なもので本業の業種商は殆ぎなげうつても後半生を採集の
ために費して學界に貢献されやうとの眞剣な努力は實に涙ぐましいものがある。

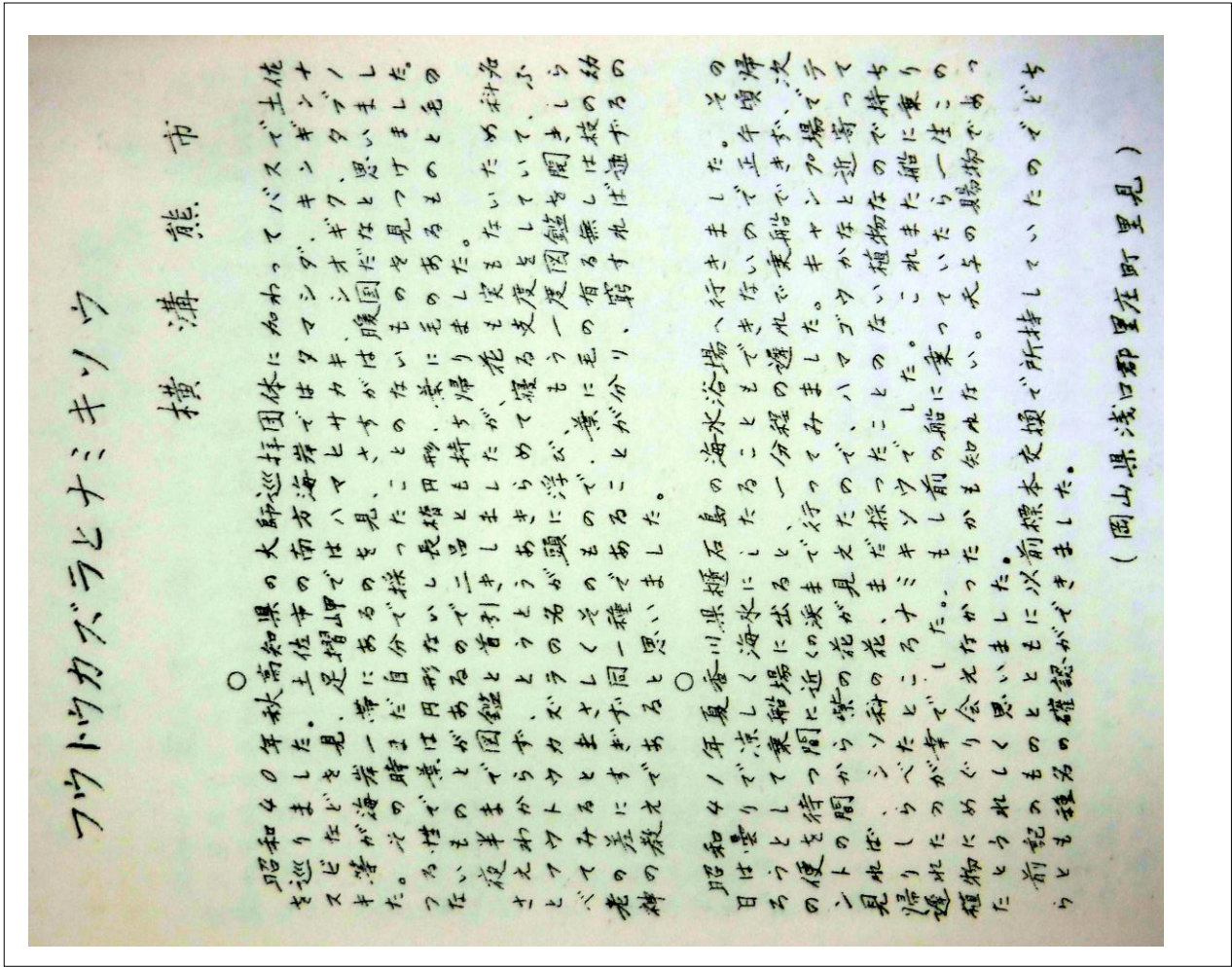
既に備中南部及瀬戸内海の島々、備中北部阿哲郡方面、伯耆大山、備後帝釋
及び北部山地、四國石槌山劍山等の地を採集され多数の標本を藏されてゐる
一地方でも數回に亘つて採集され、花果實等悉くを備へる完全な標本の製作
に留意されてゐる。ただに中國附近の植物だけでなく全國に亘つて採集家と
交はり標本の交換を熱望され、中國地方の特殊植物等は極めて多数を用意さ
れ交換用にあてられてゐる。

現に郡内に於て知られてゐる植物壹萬數千種の中先づ第一期は6000種を目標
として集めたいと常に言はれてゐる。氏のこの念願が一日も早く成就せんこ
とを祈られる方は何とぞ岡山縣淺口郡里庄村氏宛標本交換の希望を申込んで
下さい。さうすると所持標本目録を送られます。

笠岡諸島とその周辺の植物

- 横溝熊市
- ハマヨモギ 笠岡市中鳥ノ江の海岸砂地にたくささんあり、埋まらぬが、道路拡張工事のため残った。現在石砂より川の川口にたんだ株がサマ。
 - ハマコソバ 笠岡市中神島外浦海辺山麓にあり、浅口郡寄島野青在海岸断崖にあり、たもこの道路拡張のため姿を見せなく残りました。
 - クサカサ 笠岡市中神島外浦の海辺樹林中で最近採集した。これを見えなりました。ここから南に里道の工事のため残りました。ここから南に里道の香川是手島北岸には群集があります。
 - トウオオバコ 笠岡市大島入江新田及び鳥ノ江の海辺にあり。
 - マルバカミ 笠岡市大梁島東海岸にわずかにあるのを思いました。
 - マルバシロバナ 浅口郡寄島野寄島(三郎島)東海岸断崖付近に大群集があります。
 - ヒトツバ 上記マルバシロバナ群集花前岩の断崖に垂れさがる上に生じています。
 - オオヨナギ 寄島野早崎の旧塩田にありますが、昔からあり他に枯れています。
 - ヒトモトス 笠岡市白石島明庵寺前の谷間と、香川県手島北岸樹林下にたくささんあります。
 - マルバアカガ 八マゼシ・コウボウムギ・ケカモノハシ 既島南岸砂地に八マゼシとともにも採集することがあります。
 - ハマコソバ 香川県手島北岸より持ち帰り自宅に移植しました。

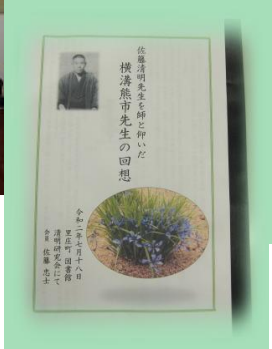
- たが20年ばかりで枯れてしまいました。
- タイミン 仙酔島にもあり、香川県・愛媛県迎りよく見られす。
 - カンキ 北木島大浦から豊浦に越す峠付近によく見られます。
 - ビロウド 北木島東岸花高岩の岩壁にたくささんあります。
 - モガシ 真鍋島郵便局境内に大樹があり、ホルトノキとしまして天然記念物に指定されています。自生ではなく他から移植されたものです。
 - イヌグス 真鍋島近くの小島にあり、天然記念物に指定されています。四国方面ではよく見られます。
 - イワタケ 真鍋島東岸波打際の花崗岩の間に生え、香川県手島の東岸にもたくささんあります。
 - アイア 笠岡市富岡の海岸にありましたが、平拓工事により下にほうむられてしまいました。
 - マメオシ 笠岡市大碓の国道2号線沿いのウマゴヤシであるいはヨモギに寄生していきまが、あまり他に採らぬ状態維持を続けています。
 - アメリカセン、ヨウシユキマゴボウ 笠岡市伏越に絶繁殖しています。
 - プタクサ 笠岡市榎宇付近の堤防に数年來繁殖していきま。
 - アリタノウ 笠岡市入江新田と神島外浦神島化学工場、裏手及び寄島野青海岸にたくささん生じました。
 - ボクセン 白石島、北木島、真鍋島、飛鳥左の岩壁に珍らしくありませぬ。



「佐藤清明先生を師と仰いだ横溝熊市先生の回想」 佐藤忠士氏



「第4回里庄のせいめいさん展」に先立ち、展示資料として「横溝熊市」の資料を提供された町内在住で横溝熊市氏と親交のあった佐藤忠士氏から、「佐藤清明先生を師と仰いだ横溝熊市先生の回想」と題してお話をいただきました。



薬種商を営む傍ら、植物採集の業績に加えて、市井の人として消防組のリーダー、石鎚講・子安講の先達を務めたことなど、熊市氏の人と業績を紹介していただきました。

※ 写真は、第27回清明研究会で発表される佐藤忠士氏と発表資料 (2020.7.18.)

第4回「里庄のせいめいさん展」

2020. 8. 1～30. 里庄町立図書館にて開催.



会場正面:キクザクラ写真



室戸台風被害図・人魚のミイラ



「横溝熊市」コーナー

今回は、調査活動が一段落し岡山県の所在が確認できたキクザクラの開花時の写真の一括展示・里庄町誌記事や佐藤清明資料の中で注目された「オオムギスゲ」・モノクロフィルムの中で発見された天台宗圓珠院の「人魚のミイラ」・植物採集を通じて佐藤清明の地元の仲間として活動し、エヒメアヤメの発見など多くの功績を挙げながら今日まで注目されることのなかった「横溝熊市」について、同氏と交流のあった佐藤忠士氏所蔵の資料等を展示いたしました。

No	展 示 品 名	数	備 考
1	キクザクラ写真	4	
2	横溝熊市氏肖像写真	1	
3	『里庄町誌』(コピー)	1	
4	オオムギスゲ実物鉢植え	1	
5	オオムギスゲ写真	1	
6	エヒメアヤメ写真	1	
7	佐藤清明著『浅口郡植物誌』	1	1932年
8	横溝熊市宛田代善太郎書簡	1	オオムギスゲ標本入り
9	横溝熊市宛田代善太郎書簡	1	
10	スネコスリのぬいぐるみ	1	「エルマーの工房」製作
11	横溝熊市著『里庄町誌』原稿	4	
12	蛇腹カメラ	1	横溝熊市遺品
13	人魚のミイラ写真	1	
14	岡山駅発行観光ガイド	1	1926年
15	室戸台風岡山市被害図(コピー)	1	原本1934年
16	吉川純幹著『日本スゲ属図譜』(コピー)	1	原本1960年
17	星野卓二著『岡山県スゲ属図譜』(コピー)	1	原本2002年
18	横溝熊市宛小坂弘書簡	1	
19	小坂弘著『鯉ヶ窪の湿原』	1	1978年
20	『哲西史』	1	1963年

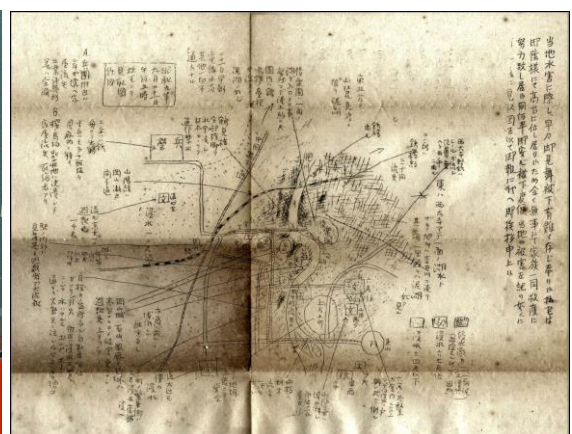
展示品の内、13「人魚のミイラ写真」・15「室戸台風岡山市被害図」は、「山陽新聞」に掲載されました。



人魚のミイラ



町内自生のオオムギスゲ
(後ろの写真は、出穂時のようす)



佐藤清明画・室戸台風岡山市被害図

横溝熊市 … 人と業績 …



1897年（明治30）5月31日～1977年（昭和52）10月27日

浅口郡里庄村里見で薬種商を営む傍ら、植物・鉱物の採集を行った。また当時、所有する人が稀だった愛用のカメラで昭和初期の里庄の風景を活写した「備中里庄名勝史蹟繪葉書」は、「町制施行35周年記念・里庄の今と昔」（里庄町発行）に掲載されるなど貴重な資料となっている。

氏の経営する横溝薬店は、後に貸本業・文具の販売も行うようになり、ご息子が経営する電気店とともに、子どもから大人まで気軽に出入りする店となった。

里庄町誌（昭和46年版）の執筆者花田一重氏（1889～1971）は、里庄町誌第8節「里庄の薬用植物」（横溝熊市執筆）の記事に続けて、横溝熊市氏について次のように紹介している。

（植物の項執筆者の）横溝熊市氏は、里庄町里見殿迫に居住し、昭和4年より3年間、文化財専門委員佐藤清明氏より植物及び岩石の指導を受け、その後植物については京大講師田代善太郎氏・東大牧野富太郎博士等に、地質については岡山大学講師宗田克巳氏等の指導を受け、現在まで41年間その収集と研究に没頭されその成果の一部として、里庄町の植物と岩石の調査を「増補里庄町誌」に発表された。世の市町村誌で植物目録等を掲げたものは稀であろう。実に本町誌の特色である。殊に佐藤氏（佐藤清明）は目録等に加筆して下さった。横溝氏は、以上の諸先生のご高恩により本稿のできたことを深く感謝しておられる。（執筆者）（里庄町誌 p.625）

<著作・論文・原稿>

- ・薬用植物漢和名辞典：発行年月日 不明、50部印刷
- ・岡山縣の薬用植物：発行年月日 不明
- ・植物腊葉標本所持目録：1932(昭和7)年 35歳
- ・岡山県の薬用植物 其ノ1 民間薬事研究会発行 1934(昭和9)年 謄写版 県立図書館 37歳
- ・石鎚山登山記 まんさく N0.9 p.22～25 1934(昭和9)年 37歳
- ・植物方言 其ノ1 浅口郡西部 1935(昭和10)年 非売品 謄写版 県立図書館 38歳
- ・「里庄町町誌」記事執筆（里庄町町制施行記念・昭和26年発行）



- ・方言会話の一例(農業者)・植物方言： p.119～130
- ・里庄町植物目録： p.133～146
- ・町内薬用植物一覧： p.146～151

写真は、里庄町町誌・昭和26年版表紙と横溝熊市執筆の原稿

（里庄町立図書館蔵）

- ・浅口郡及び玉島市植物目録：1953(昭和28)年 55歳
（里庄町立図書館が「原稿」のみを所蔵）
- ・エヒメアヤメ備中に産す：備中の植物、N0.4、p.8～9 1955(昭和30)年 57歳
- ・フウトウカズラとナミキソウ：吉備の植物、No1 p.13 1966(昭和41)年 68歳
- ・笠岡諸島とその周辺の植物：吉備の植物、N0.3、p.11～12 1967(昭和42)年 69歳
- ・「里庄町誌」記事執筆（昭和46年発行） 73歳
 - ・里庄町の自生植物概観：p.597～599,
 - ・里庄町の自生植物目録：p.599～614,
 - ・町内帰化植物の変遷：p.616～621,
 - ・御嶽山の植物：p.621～622,
 - ・町内の薬用植物：p.622～625,

論文等のうち、

太字の5編は本号に掲載。「エヒメアヤメ（タレユエソウ）備中に産す」は、会報5号に掲載しています。

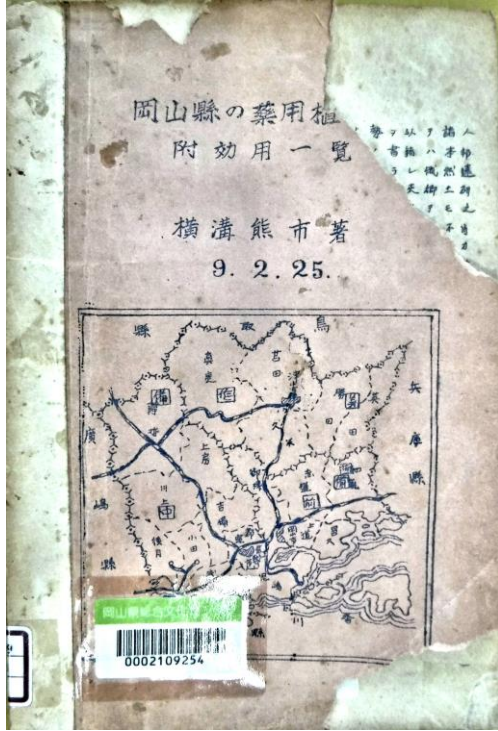
横溝熊市の著作

① 岡山県の薬用植物

発行日 昭和9年2月25日

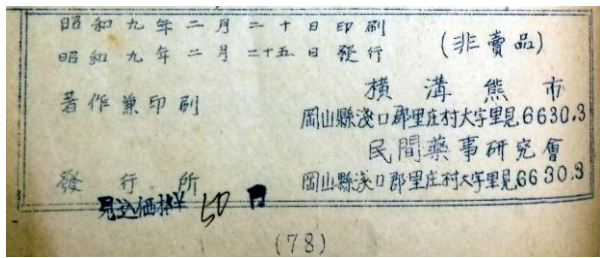
発行所 民間薬事研究会 (所在は自宅)

(岡山県立図書館・佐藤忠士氏所蔵)

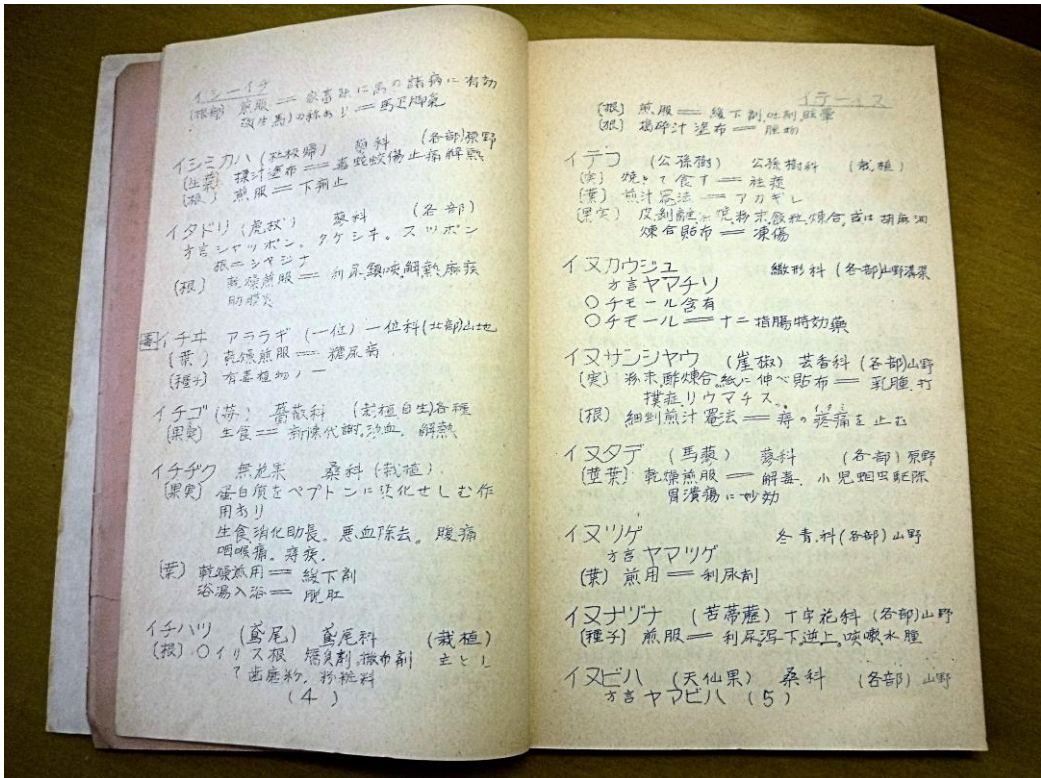


自序
 近来本草学ノ研究日進月歩ノ勢ヲ以テ諸人ノ注目サルルニ當リ一般其道ノ書籍ハ本邦ハ素ヨリ諸外国ノモノオモ載セラル俄然遠山ノ燈火ヲ望ム感ニ過ギズ尚ホ近来郷土研究ノ聲高キ折柄ニ付キ薬用植物トシテモ之レガ必要ヲ認メ 不肖
 浅學ヲ顧ミズ「岡山県の薬用植物」と題シ聊カ筆ヲ執ル事トナシタリノ一事タリ共諸彦ノ参考トモ相成ラバ小生ノ幸之レニ過ギタルナシ
 先輩諸士ノ御後援ニ抛リ脱落誤謬ノ訂正ヲ希ヒ増補再版ノ期ヲ望ム次第ナリ
 昭和九年初春 著者謹白

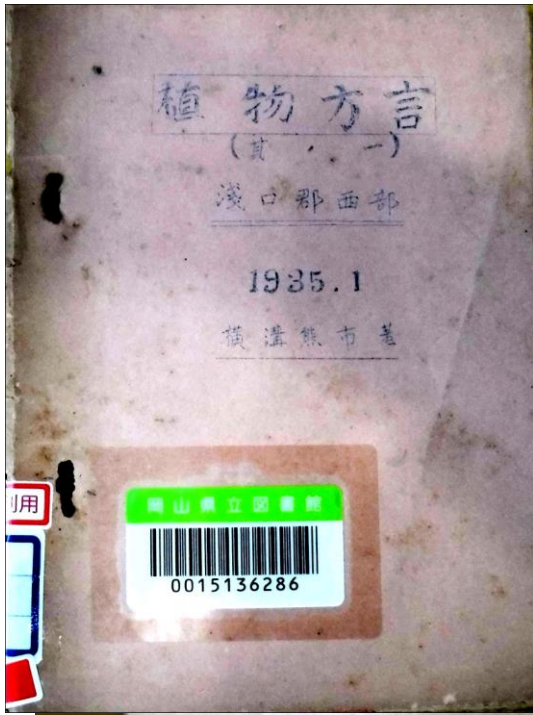
(ガリ版刷り。スペースの関係で活字にしています。)



ガリ版刷り。自宅で印刷製本。見込価格は昭和40年に岡山県総合文化センター図書館が収蔵時のもの。

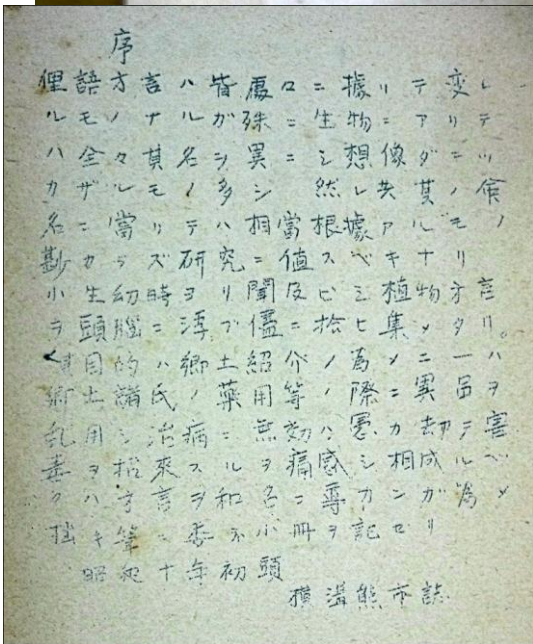
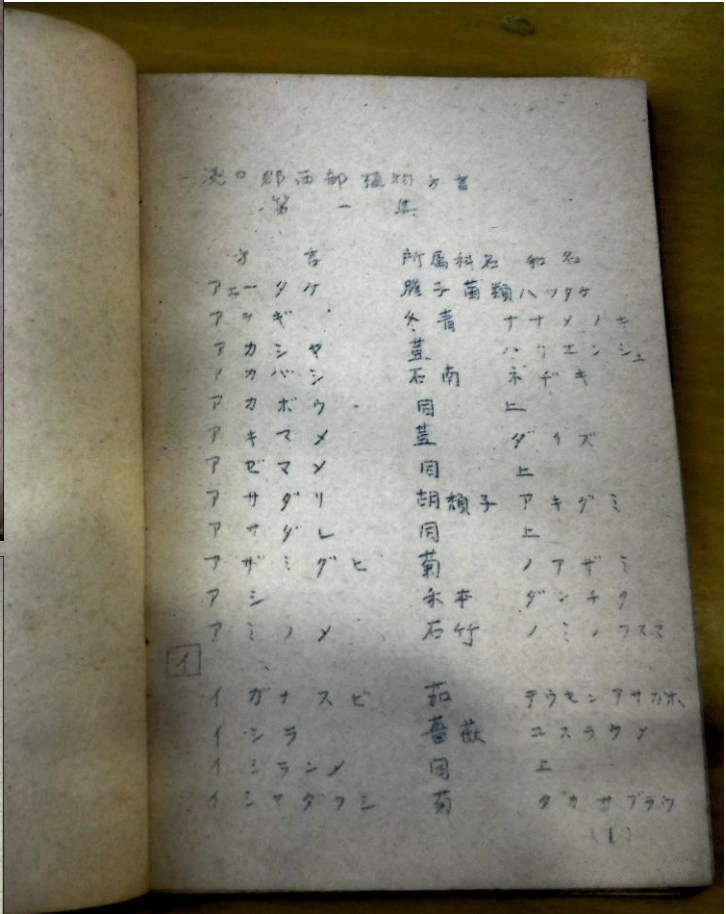


B5判78ページ (自序・注意事項・凡例・本文) …掲載薬用植物 約490種



② 植物方言

発行日 昭和10年1月10日
発行所 横溝熊市・横溝薬店



序文に、発行目的として郷土の植物方言の紹介に加えて、名前を間違えた服用による「無効・薬害」を防ぎたいと記していて、薬店主の面目躍如。更に、奥書に「昭和拾年一月十日夜半印刷」とあり、仕事の合間に寸暇を惜しんで取り組まれたご様子が伺われる。

「田代善太郎発信、横溝熊市宛て書簡」ほか



横溝熊市は、植物標本交換等を通じて多くの研究者と交流した。「第4回里庄のせいめいさん展」にて初公開の「室戸台風岡山市被害図」は、岡山市在住だった佐藤清明が書いたものと推測できる。

横溝熊市の標本蒐集（植物・鉱物）

里庄町歴史民俗資料館所蔵

幸いなことに、横溝熊市が蒐集した膨大な量の腊葉標本や鉱物標本の一部ではあるが、段ボール箱や木箱に収められ里庄町歴史民俗資料館収蔵庫に保管されている。（未整理）

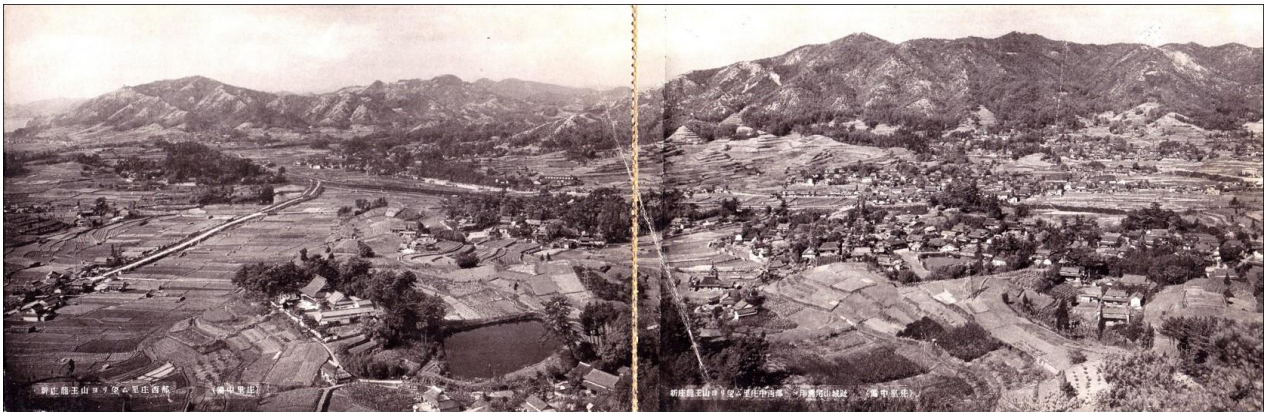


愛用の写真機による「備中里庄の繪葉書」発行



備中里庄名勝史蹟繪葉書
(12枚組 備南光影会発行)

落成直後の村役場（まだ、石材等が片付けられていない。）



写真（下）は、龍王山から見た新庄～大原（村役場）を望む風景、右上は、昭和6年、落成間もない里庄村役場

<編集後記>

新型コロナウイルス蔓延下ではありますが、地道な活動の内容を「第4回里庄のせいめいさん展」・特別展「池田厚子様と佐藤清明ゆかりの菊桜展」の開催等を通じて発信することができました。「第2回清明を読む会」においては、当会顧問土岐隆信氏が本草学に始まる日本の植物研究の流れに岡山県内の民間植物研究者、更には里庄町出身の3名の方を位置づけてご講演くださいました。お話しに引き込まれメモがおろそかになってしまいましたので、感動した勢いで巻頭論考としてのご執筆をお願い申し上げたところご快諾を賜り本号掲載の運びとなりました。あわせて、横溝熊市氏執筆資料を一括掲載いたしました。植物名等について、ガリ版刷り・カタカナ・旧仮名遣いといったことから、転記ミスを心配し写真画像で掲載致しました。読みづらいですが、ご諒解ください。（会報担当・佐藤泰徳）

佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No.6

発行日 令和2年12月10日
発行者 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館
会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 中尾茂男
住 所 719-0301 岡山県浅口郡里庄町里見 2621
電 話 0865-64-6016

ホームページ : <http://www.sl.net.town.satosho.okayama.jp>
Eメール : sl.net@sl.net.town.satosho.okayama.jp